

由良 ゆら

鋪谷 かぶらや

嘴矢 こうし

「しばらくお待ちください。旦那様はすぐにいらっしゃいます」
そう言って執事が出て行くと、広い、古い調度品で囲まれた応接室に私は一人残された。

私は、話には聞いていたものの、二十二世紀のこの時代になっても、いまだ存在していた執事という職業を目の当たりにして、黒服の男が出て行ったドアをじっと見つめていた。

興奮が冷めると、少し不安になって、私は一人で、L・トジ博士の古めかしい館に来たことを後悔しはじめた。

生科学の大御所であるトジ博士は、その天才ぶりと独特の奇癖で、長らくマスコミ泣かせであった。

博士を取り巻く数々の、ミステリアスな噂の中には、博士がクロール操作を行って、牛ほどもあるナマズを作ったとか、言葉話す犬を作ったと言うものがあった。

中には人間のクローンを作っているという口さがない連中もいた。つまり、トジ博士は、普通なら、私が生涯会う事のない極めつけのマッド・サイエンティストなのだ。

しかし、私はここに来なければならなかった。

そう思いながら、私は脳裏に、颯爽と社内を歩くデルの姿を思い浮かべていた。

ミシェル・レイデルは、私と同じ新聞社に勤める女性だ。

しかし、万年校正員の私と違って、彼女はすこぶる優秀で、今まで何度も特ダネをものにしていく。

優秀な上に、彼女は美しかった。

同期の者始め、社内の男のほとんどは、できることなら彼女をものにしたと願っているだろう。

もちろん、私もそのひとりだ。

だが、このままでは、その望みは方に一つもないだろう。

社内には知らない者のいない彼女と違って、彼女は私の名前どころか、存在自体も知らないに違いない。

だからこそ、彼女の得意とする政治分野とバイキングしない科学の分野で、私はすっきりとしたクリーン・ヒットを飛ばさなければならなかった。

かつて、誰もインタビューできなかった、孤高にして偏屈な科学者、
L・トジソン博士の単独インタビューを成功させるのだ。

やがて、ドアが開き、灰色のガウンに身を包んだ老人が現れた。

「どうもお待たせしました」

ソファに座ると、老人は射抜くような鋭い目で私を注視した。

「それで用件は何かね。早くしてくれたまえ。私は普通なら誰にも会
わないのだが、君はタネ博士の推薦状を持っていたから会ったのだ」

そう言われて、タネ博士の研究室と自宅に座り込んだ二ヶ月の苦勞
の日々が一瞬、脳裏をよぎった。

「……」

万全の用意を調べてきたはずであったが、人類が生んだ大天才の、
眉間に深く刻まれた皺、落ちくぼんだ目を目の当たりにして、何から
話して良いか分からずに、私は最初の言葉を搜して沈黙を続けた。

「用が無いなら、帰ってくれたまえ」

「ま、待って下さい」

腰を浮かそうとする老人を引き留めて私は叫んだ。

「カオリ、カオリを生き返らせて下さい」

やっと予定していた言葉が出た。

「カオリ？」

怪訝そうな顔をする老人に、私はカプセルを突きだした。

「君、それは……」

老人がカプセルを手になると、私は言った。

「そうです。骨髄液です」

細胞を活性化したまま保存する電磁フィールドが一際高まり、カプ
セルが身震いするように、ぶうんとうなった。

「まさか、君は……」

「そうです。博士にカオリをクローン再生していただきたいのです」

それから、私は、婚約者の三島カオリが、結婚式の二日前に自動車
事故に遭い、半月後に死んだ事。一縷の望みをトジ博士のクローン再
生技術に掛けるため、担当医師に頼み込んで、カレンの骨髄液を採取
し、電磁フィールドカプセルに封入した事を博士に話した。

「トジ博士。私もかくてT大で生科学を専攻した者として、博士のなさっておられる研究が、我々のもより一步も二歩も進んでいることが分かっていきます。博士のクローン再生技術を使えば、必ず……」

「駄目だ」

言下に博士が言った。

「何故です？」

「理由は二つある。一つは、これが一番の原因だがクローン技術がまだ不完全だということだ。私も、ヒトの完全なクローン化には成功していない。そしてもう一つは……」

「もう一つは」

「心」

そう言って、博士はしばらく口を閉ざした。

「こころ、心って何です」

博士は応えなかった。私がなおも問うと、博士は重い口を開いた。

「君は人格を持ったクローンの気持ちがかかるというのかね。もし君の婚約者が再生されたとして、彼女は自分の人工の生命を喜ぶとでも思っているのかね」

「そんな事はわかりません。でも、このままではカオリがかわいそうです」

「それは君のエゴイズムだ。君は自分のエゴのために、愛する者を苦しめようとしているのだよ」

演技であることを忘れ、私は我慢できなくなって叫んだ。

「博士は矛盾しておられます。クローンに成功したことが無いのなら、どうしてそんな事が分かるのですか」

「それは……」

トジ博士の目が宙をさまよった。が、やがて決意をしたように軽くうなずくと、口を開いた。

「私も老いた。あの事を、私一人の胸の中にしておくには年をとりすぎてしまったようだ。」

聞きたまえ、老人の昔話を。

そして考えたまえ、どうすることが君の婚約者にとって一番よいことかを」

老人は、目を閉じると静かに話しました。

「ルトヴィッチIIトジ、年齢二十二歳、M……大学理学部生物学科を二十八年に卒業……B大学にて博士号取得……」

経歴をそこまで読み上げて、ニール博士がじろりと私を見た。

私は、胃のあたりが緊張で痛くなるのを感じた。

この世界的な不景気の中、望む仕事にはなかなか就けない。

今は、その就職が決まるかどうかの瀬戸際なのだ。

「どうやら経歴に問題は無いようだ」

「はあ」

「ところで、君、体は丈夫かね」

「はい、それだけは自信があります」

すると、博士は奇妙な事を私に命じた。

「君より五代前の先祖にさかのぼった調査データを三日後に提出して欲しい。特に、肉体表と精神面に重点を置いてな。できるかね」

「分かりました」

「うむ。その後で、君の採否を決める事にする」

三日後、私が分厚い書類を提出すると、その日の内に採用が決定した。

その日から、私の研究所での生活が始まった。

数日後、私は健康診断のためということで、少量の血液と細胞をニール博士に提出させられた。

研究所で、すぐに私はトミイという青年と親しくなった。聞けば、

トミイも今年、研究所に採用されたのだと言う。

「K大だったら、何度かシンポジウムで行った事がある。僕はヨミタ教授のクローニング研究に興味があったからね」

「僕は、ヨミタ教授の下で研究をしていたんだ。でも、教授はいつも

言ってたぜ？」

「何て？」

「自分達のやっていることは、ニール博士の理論の証明に過ぎないっつよ」

「僕もだ。僕が師事したアキバ教授も、研究を続けるつもりなら、掃除夫としても良いから、ニール研究所に潜り込めと言っていたよ」

当時、生科学の分野が一番進んでいたのは、ニール生物研究所であったのだ。

私がトミイと一緒に住むようになったのは、私が今住んでいる下宿の不平を、軽い気持ちで口にしたからだった。

「管理人のオバさんは、感じ悪いし、階段はギシギシいうしね」

すると、トミイは得たり、とばかりに笑うと、私に言ったのだった。

「だったら、僕の下宿に来ればいい」

当時、ニール博士は、研究の方は放りっぱなしで、私たち小数の研究員に任せ、自分はおっぱら造形美術の研究をしている様子だった。

博士は、あらゆる方面に素晴らしい才能を持っている人物であった。

私も、時折訪ねる博士の館で、見事に彫り挙げられた彫像を見る機会があった。

理由は分からないが、私は格別博士に気にいられたようで、勤め始めて三年が過ぎる頃には、副所長の大任を与えられて、当時体を悪くしていた博士に代わって、研究所のほとんどの裁断するようになっていた。

それにつれ収入もふえ、私は一戸建ての家を研究所の近くに借りてそこに住んでいた。

「だめだよポール。メモリをそんなに食うプログラムは、ウチのシステムじゃ動かせないよ。せめて一二〇ペタバイト程度に抑えてくれ。ああ、クロノスは消せないよ。あれはコンピュータ・グラフィックスによる遺伝子解析と再合成のキモなんだから」

身長百九十センチのポールが吠えるようにぼやいた。

「仕方がねえなあ。よっしゃ。一三十五ペタで手を打ちましょう。いいですね。副所長」

「仕方ないな」

「あ、これからバイオ・サイエンス学会の編集ビデオを見るんですが一緒にどうです？」

「いや、実は昼食がまだなんだ。これからメシだよ」

そう言って、私は食堂へ向かった。

研究所だけあって、食事の時間は皆不規則だ。午後三時になろうとしているのに、食堂には大勢の研究員がいた。

チキンサンドを頬張っていると、後ろのテーブルの会話が聞こえてきた。

「でもな。最近、この研究所、予算が厳しいんじゃないの」

「そういえば、年々、割り当てられる予算が少なくなっているよな」

「でも、そんな訳ないだろ。去年だって、不治の病だとされていたヌルゲロイド病の特効薬を発明したし、資金に不足はないはずだぜ」

その通りだ。天才ニール博士率いるニール生科学財団所属ニール生科学研究所に不況はない。

しかし……

「噂によると、ニール博士が、とんでもない金額を自分の個人研究につぎ込んでいるそうだ」

「しっ、滅多なことを言うもんじゃない」

おそらく、誰かが私の後ろ姿を指さしたのだろう。

私はその会話が聞こえていないふりをした。

しかし、彼らの会話は、私の胸に重く沈んだ。

その懸念が、最近の私の心に棘となって笹会っていたからだ。

研究費の私的流用は犯罪だ。

経理を始め、どこからこういった噂が外部に漏れるか分からないのだ。

それに、体調を崩して休養しているニール博士が、それほどの資金を秘密裏に使っているというのにもわかに信じがたいことだった。

「トジ、久しぶりだな」

そんな折、病気で寝ているはずの博士が、突然研究所にやってきた。

「博士、お体はもうよろしいんですか」

私が声をかけると、博士は笑いを顔に浮かべたが、その顔色は土気色だった。

明らかに死相が現れている。

「どうやら、私ももう駄目のようだ。最後に、この半生を過ごしてきた研究所を見ておきたいと思ってな」

よろめきながら、所長室へ向かう博士の後ろをゆっくりと追う。

独立心の強い博士は手を貸されることを極端に嫌うのだ。

しかし、そんな博士も、さすがに部屋に入り、デスクに向かう途中でよろめいた時に、腕を持って支えても文句をいわなかった。

そのまま、私は、博士を巨大なデスクの前の椅子にゆっくり座らせた。

「トジ、私は若い頃から天才だともてはやされ、自分でもそう思ってきた。しかし、最近になって、私は何者をも、またいかなる物も生み出していないことに気づいたのだ」

「何をおっしゃいます。博士の成し遂げられた偉業は、歴史に残るものです」

本当にそうであった。

「冷たい数字の羅列を残したところで、いったい何になろう。私は今になって、結婚し、子供をもうけなかったことを、悔やんでいるのだ。

だから……」

「だから？」

「いや、なんでもない」

そう言っただけで博士は、椅子を回転させ、窓を見やった。その景色は、今しも夕陽が沈んでいくところだった。

ニール博士は、しばらくのあいだ、黙って落日を眺めていたが、やがて咳くように言った。

「今までありがとう、トジ。君には随分世話になった。私には身寄りが一人も無い。私の個人資産は、全て君の所に行くように手配をしておいた。家屋敷、この研究所、全てだ。でも、何よりあれを、あれを可愛がってやってくれ。頼む。あれは……孤独な……君の」

咳き込むような音がし、博士は机に突っ伏した。

近寄って脈を取ると、博士はことごときれていた。

顔をあげ、椅子に座ったかたちに体裁を整えると、私は人を呼ぶために部屋を後にした。

。
ドアのところで、背後から呼ばれたような気がして振り返る。

そこには、夕陽を背に、眠ったように椅子に座る博士がいた。

生まれついでにの天才に、大輪の華を咲かせ、生化学理論の多くに、自らの名を残した偉人の最後の表情は、寂しく、また穏やかであった。

私は、この一代の天才の最後の時に立ち会えた事で、深い感動と悲しみを同時に味わいながら、部屋を後にした。

その後、様々な手続きのあと、博士の遺体を病院に移した後、私は自宅に帰った。

窓辺に置かれたグランドピアノの前に腰掛けて、ぼんやりとしてみると、玄関のチャイムが鳴った。

「どなた」

尋ねると、外から軽やかな女性の声が聞こえた。

「ニール博士のお言いつけで、やって来ました」

ドアを開けると、そこには十七、八の娘が古風な白いドレスを着て立っていた。

「あなたは一体……まあどうぞ、中にお入り下さい」

娘は部屋にはいると、ソファの上に静かに座った。その振る舞いの一つ一つに、上品な優雅さがあった。

若い娘の前に、私は何を話していよいか見当がつかず、尋ねた。

「それでいったい、ニール博士は何と言われたのですか」

私は言葉を途切れさせてしまった。薄暗い廊下から明るい部屋に入り、私の言葉に答えて顔を上げた娘が、異常なほど美しかったからだ。

長い髪は、朱房のついた紐で束ねられ、切れ長であるが大きい瞳、形よく通った鼻すじ、夢見るように開かれた唇。

無神論者をもって認ずる私も、思わず、天使が地上に降りればこうではないか、と思ったほどその娘の美貌は際だっていた。

「ニール博士は、自分に、もしものことがあった時には、トジさんをお訪ねして、これをお渡ししろとおっしゃいました」

耳に心地よい声でそう言うと、娘は一通の手紙を差し出した。

手紙をあらためると、それには確かにニール博士の封印がしてある。手紙を開けながら私は尋ねた。

「ところで、君の名前は」

「私の名前は、ユラ。由良といいます」

「日本の和歌にある、日本海の『ゆらのと』の由良かい」

娘の顔がぱっと明るくなった。

「そうです。あの美しい海からお前の名前をつけたんだよ、とニール博士が言っておられました」

その時、一抹の寂しさをたたえた由良の瞳が微かに曇った。それを見て私はあわてて尋ねた。

「ニール博士が名付けた。すると君はニール博士のお子さんですか」
そんな話は聞いた事が無かった。

「いいえ、違います」

私は訳が分からなくなった。しかし、とにかく事実関係ははっきりさせておかねばならない。

「で、博士は、君にどうしろと言ったんです」

「はい、博士は私に、あなたに一生お仕えしろとおっしゃいました」

「何だって」

私は叫んだ。いきなりそんな事を言われても困る。

「自分で何を言っているか分かっていますか」

「分かっています」

「ちよ、ちよっと待ってくれ。それは困る。こつちにも都合があるんだ」

あわてる私に、由良が瞳を輝かせた。

「私も、ご迷惑ならば、おいとまをしようと思っていました。でも、トジさん、あなたに会って気が変わりました。あなたは本当に、博士の言っておられた通りの方ですもの」

いったいどうなっているんだ。そう呟くと、私はあわただしく博士の手紙を封筒から取り出して目を通した。

「親愛なるトジ。君がこの手紙を読んでいるという事は、私の身に何があったということだろう。おそらくは、最近悪くなった心臓疾患による死が私に訪れたに違いない。

ナノテクノロジによる延命にも限度があるからね。

私の身に何かあれば、由良にこの手紙を持って、君を訪ねるように言っておいた。

トジ。

君に由良の秘密を知らせておかねばならない。

君は私がここしばらく、研究から遠ざかっているのを不思議に思っていたようだが、私はこの三年間、屋敷である研究をしていたのだ。世間に知れると、おそらく倫理面から非難を受けるだろうから、極秘裏に進めた研究だった。

さて、本題に入ろう。

なに用件のみで事足りる。

由良の事だ。

驚いてはいけない。

由良は、研究の結果、生み出された純生クローンなのだ。

トジ、君に彼女を預ける。大切にしてやってくれ

限らない信頼を込めて ニール・グラウス・サイモン」

読み終わってから、私は改めて由良を見た。

おそらく、博士の天才は、由良の容姿にも存分に活かされたのだろう。

顎の線。

手足のライン。

澄んだ瞳。

そのそれぞれの生み出す美しさは神々しいほどだ。

「分かったよ、由良。君はここに居てもいい」

「本当？」

由良の顔がぱっとほころんだ。白くしなやかな手で私の手を握って言う。

「ありがとう、トジ。私、きつとあなたのいい奥さんになるわ」

安心したのか、急に由良の言葉が砕けた調子になった。

可愛い女の子が喜ぶ姿を見るのはいいものだ。

しかし……

私は由良が何か重大な勘違いをしていることに気づいた。

「君は何か思い違いをしている。君は、私の奥さんとしてじゃなく、そうだな、妹、妹としてこの屋敷に居てもらおうんだよ」

「嫌です！」

驚くほど激しい剣幕で由良が叫んだ。

「トジ」

由良が長いまつ毛を伏せて言った。

「私、そんなに魅力ないかしら……」

そんな筈はない。彼女に魅力が無ければ、いったい誰にあると言うのだ。

だが、彼女は「自然な」人間ではないのだ。けじめはきっちりつけておかねばならない。

「とにかく、だ。対外的に君は僕の親戚の女の子という事にしておく。そのうちに、君の身の振り方も考えられるだろう。いいね。由良」

最後に私がこう言ったときに、由良は、大きな瞳に悲しみの色を宿し、こう答えた。

「トジが言いたい事、よく分かる。でも、私はどうしても、トジの奥さんになりたいの。もう決めてしまったんだもん」

決めてしまったんだもん……？

私は絶句した。

次の言葉を探して私の視線は部屋をうろついたが、やがて、あきらめて言った。

「まあいい。今日はこのへんにしておこう。もう夕食の時間だしね」

私は台所に行こうとした。

「あ、お料理？私に任せて。お料理なら得意なのよ」

先ほどまで涙ぐんでいた少女は、そう言うと、はりきって台所へと降りて行った。

やれやれ。小さな台風だな。

まるで子供だ。私は呟いた。

さらに良いことに、いや、困ったことに、おまけに美しい。

由良の料理は素晴らしかった。

この方面に関する、ニール博士の教育は完璧なようだった。

ドイツワインで始まる料理の美味さは、私の口を軽くした。私と由良は食事の間中、よく話した。私の陽気な話と、由良の控えめな返事が食事の合間に続いた。

その内容をもっぱら、大学時代からの友人で、今は同じ研究所に勤めている副所長のトミについてであった。

その夜、空いている部屋を由良に与え、私は眠りについた。

次の朝、私が目を覚ますと、部屋はきれいに片づけられ、朝食の香りが部屋にあふれていた。ガウンをはおって、ダイニングに入ると、由良がドレスのまま、かいがいしく動き回っていた。

「由良、何をしてる？」

私の声に由良は振り返って、明るい声で答えた。

「おはようございます」

「おはようはいいが、何をしてるんだ」

「お掃除」

あたりまえよ、という表情で由良が言った。

「だって、とつても汚いんだもの。男の一人暮らしはキタナイって博士がおっしゃった意味がやっと分かったわ」

「うう」

痛いところを突かれて、私は返事に窮して

「うほっ」

咳払いをして言った。

「しかし、ドレスのまま掃除をしてはいけないよ。服は持っていないのかい」

由良はこくんとうなずいた。

その後であわててつけ加える。

「でも、ニール博士のお屋敷にはたくさんあるの」

「うむ」

それでは、午後からでも、博士の屋敷に服を取りに行くとしよう。

私が、そう言うと、由良は不思議そうな顔をした。

「あら、トジが博士のお屋敷に越してくると思ってた」

なるほど。その時、私は博士の家、屋敷、財産の全てを相続した事を改めて思いだした。

途端に、身震いがした。

その遺産が、生科学に関するパテントその他を併せて、途方もない額になることに思い至ったからだ。

それから一週間、私は研究所を早退すると、由良と共に車であちこちへ出かけた。由良に外の世界を見せるためだ。聞くと、由良は今ま

でに一度もニール博士の屋敷を出たことが無いらしかった。海、山、草原。知識としては知っているが、実物を知らない由良は、見る物全てが珍しく、楽しく思えるようであった。由良は、行く先々の景色に瞳を輝かせながら、叫ぶように言った。

「草の匂いがかんなにかぐわしいなんて、百科辞典では絶対わかりません。本当になんて美しいのかしら。ありがとう、トジ。素敵なところへ連れてきて下さって」

私は、自分の中に由良に対する愛情が育っているのに気づいた。

その感情は日増しに大きくなっていった。

今や、私は由良が人造人間であろうと、そんなことはどうでもよくなってきたのだ。

どんな女でも由良ほど可憐な花嫁に、由良ほど夫思いの妻になることは望めまい。

一カ月後、自分の気持ちを隠せなくなった私は、由良にプロポーズをした。涙ぐんでうなずく由良に、私は銀の指輪を手渡した。

それから三カ月間、私と由良は夢のような月日を過ごした。私は副所長のトミと以前からやってみたかった特殊溶解駅の開発を始めた。

そして、その開発に一応のめどのついたある日の夕方、研究所から帰ってきた私に向かって、珍しく、お願いがある、と由良が言った。

「実は買ってきていたきたいものがありますの」

「何だい。君が欲しいと言うものなら盗んでも持ってくるさ」

私の言葉に、由良はいたずらっぽく笑いながら言った。

「そう、では、私のために、レモンを盗んで来てくださるかしら」

「いいとも」

そういいかけて。私は由良が何を言おうとしているのか気づいた。

「由良、すると君は、いや、僕たちの、本当か」

強引に肩を揺さぶる私に由良はこっくりうなずいた。私は力一杯に由良を抱きしめると、屋敷の外へ飛び出した。

その夜、私はソファの横に、由良を座らせて言った。

「由良、この手を見てくれ。今まで見慣れた手だ。そして君の手も」
うなずく由良に私は続けた。

「でも、この手は昨日までの手とは全く違うものなんだ。どうして分かるかい」

黙って首を振る由良の手を取って私は続けた。

「昨日まで、この手はただの男の手だった。だけど、今日からは違う。これは父親の手だ。」

君が父親にしてくれた。そして君のこの手は母親の手だ。今までとは違う。なるほど、君の前には有史以来から続く先祖というものはないかもしれない。でも悲しむことはない。なぜなら、君の後には僕と君の血を受け継ぐ子供達が、はるかに続いていくのだから」

そして、私は由良に激しい運動を禁じ。明日から、書庫の整理をできるように命じた。それなら適度な運動になるだろうし、ニール博士と私の蔵書を合わせて、五万冊程の本が書庫に未整理のまま積まれているからだ。

ああ、私は神など信じない。神がいるなら、なぜこの時私をとめてくださらなかったのか。

それから数日後、由良は研究所にやってきた。

「何でも、君の仕事場が急に見たくなつたそうだ」

トミが私にそう伝えた。私はその時、手が話せない用事があつたので、軽い気持ちでトミに案内を頼んだ。

しばらくすると、廊下にあわただしい足音が響き、トミが半狂乱で部屋に飛び込んで来た。

「トジ、由良が、由良が溶解水槽に飛び込んだ！」

「なにっ」

叫ぶなり、私は駆けだしていた。トミの言葉が何を言っているのかは分かつたけれども、その意味を理解してはいなかった。心臓は早鐘を打ち、頭の中は真っ赤だった。地下にある溶解槽にいくまでの間に、廊下ですれ違う所員達は暢気そうに、次々と私に声をかけてきた。

「所長があんなお美しい奥さんをお持ちだったなんて知りませんでしたよ」

「本当に、所長も隅におけませんね」

しかし、そんな言葉は私の耳に届きはしなかった。所員を突き飛ばすようにして私は地下に走った。地下の人気の無い溶解室へ入ると、一種独特な酸の臭いが鼻についた。溶解槽に近づくと、その前には由良の履物がきちんと揃えて脱いであり、その上には手紙が置いてあつた。

「すまない。僕が目を離している間に」

後ろでトミの声がした。振り向くと、トミが真つ青な顔をして壁にもたれるように立っていた。私はたまらなくなつて叫んだ。

「由良、由良、なぜだ」

私は溶解槽に飛び込もうとした。その私を力強い手で後ろからつかんでトミが言った。「落ち着け。トジ。君が死んで何になる。それよりも、由良がどうしてこんなことをしたのか、それを知らなければ。このことを知っているのは、君と僕だけなんだから」

トミの言葉に一応の理性を取り戻した私は、無駄と知りつつ、溶解槽の底をさらった。すると、何か光るものが出てきた。それは、銀の指輪だった。この特殊溶解駅は貴金属は溶かささない。

「これを」

指輪を握りしめて泣く私に、トミが手紙を差し出した。

「読むんだ。ここに彼女の最後の意思が書かれている」

手紙を呼んだ私は声も出なかった。なぜ、由良があれば私を慕ったのか、私を信頼し、愛したのか、またなぜ彼女が死ななければならなかったか、その全ての答えがそこに書かれていたからだ。

由良の手紙、そのやや震えをおびた美しい筆跡の中には、私たちの避けられぬ真実が語られていたのだった。

トジ様。

どうか私を責めないでください。こうするより他に方法がなかったのです。先日より続けていた書庫の整理の途中で、私は隠すようにして置いてあった書類を見つけました。そして、分類するために何気なく読んだそのファイルにはこの私、人造人間、いいえクローンの製作過程が示されてありました。私はニール博士に生化学の知識を教わっていましたから、それが何を意味するのかすぐに分かりました。

トジ、私はあなたのクローンだったのです。あなたがニール博士に差しだした細胞から創り出された、あなたのコピーが私だったのです。もつとも、博士は染色体に手を加えて私を女性にしましたが。

トジ、許して下さい。私はあなたの子供を生むことはできません。それは許されない事です。ああ、トジ、私はあなた無しでは生きて行けません。でも、二人で生きることとはとても許されないでしょう。だ

から、私はこの世から消えます。トジ、私は二人で過ごした数カ月を、決して短いとは思いません。何十年生きていても、本当の人生を知らないでいるよりは、たとえ少しの間でも充実して生きられたことを幸せに思います。

心から愛と感謝をこめて

由良

老人は話し終わると、がっくりと肩を落とした。

「それは事実なのですか」

老人が話をしている間、その目に宿っていた光が消えるのを見て私は言った。

「信じてもらおうとは思っておらんよ。このことを知る唯一の人間であるトミは十三年前にアフリカに、あてどの無い旅に出てしまっただけが知れないし。由良の手紙はその時燃やしてしまった。今私の手に残っているのは、これだけだ」

そういつて老人は机のひきだしから銀の指輪を取り出した。

「それは」

「そう、これが由良が最後まで身につけていた指輪だ」

立ち上がりながら老人はそう言った。

「その後、クローンを造ろうとはなさらなかったのですか。ニール博士の資料で」

去って行く老人においかぶせるように私は尋ねた。

「何度も試みたよ。だが、博士の資料は由良がすべて処分してしまった。私はあらゆる努力を試みたが、いずれも失敗ばかりだったよ。結局天才という点では私はニール博士に遠く及ばなかったのだ。もっとも、研究の副産物ときおり学会に発表して名前だけは有名になりはしたが。しかし……」

遠くをみる眼差しで老人は言った。

「それで良かったのかもしれない。もし新しい由良を生み出していたとしても、私は幸せにしてやることはできなかっただろう。それに、月日は人を醜くし、思い出を美しくする。トミも私の執念に愛想をつかしてアフリカに行ってしまった。私も年をとって、少しは冷静に考

えられるようになった。おそらく私も、人並みに結婚をして、自分の家族というものを持つべきだったのだろう。しかし、私は一生涯、由良以上に愛する人と出会うことはなかったのだ」

そう言い残し、老人は部屋を出て行った。私は一人、夕日のさす部屋に残された。私は机の上の銀の指輪を見、周りの古い調度品を見た。と、不意に私は部屋の中に老人の語った由良という女性の若々しい息吹を感じたような気がした。

「何だこれは。こんな質問の仕方はないだろう。せつかくのいい企画が台無しだ」

私の持ち帰った政局インタビューを見て、編集長が怒鳴った。それでは、というので、私は、密かに博士から取材した昔話を編集長にした。

最初はとっておきのネタだという私の言葉に身を乗り出して聞いていた編集長も、話が進むにつれて、だんだん表情が険しくなった。そして、私が話し終わると、ついにかんしゃくを爆発させてしまった。「この役立たずが。何がクローンだ。寝ぼけるのもいいかげんにしろ。現在ですら、人間はおろか、下等生物も確実にクローン化できないんだぞ。それを百も承知の博士がそんな事を言うものか。もしそう言ったらとすれば、お前を単にからかっただけだ。もういい、記事は他の奴に任せる」

さんざんな編集長の言葉にがっかりする私に声をかけてくれたのは、あのデルだった。

そして、その日は二人で食事をしてシネマを観た。やがて、私とデルは結婚した。しかし、いざ結婚してみると、私が結婚というもの、また女性というものに対して持っていたそこはかとなない憧れは、もののみごとに打ち砕かれてしまった。

今、こうして子供のわめき声を聞きながら、仕事の忙しいデルに代わって皿洗いをするたびに、私はトジ博士の、ある意味では美しく、ある意味では儂い、またある意味では科学的な、そして一種理解不能な物語を思い出すのだ。

そのうちに博士に会って、もっと詳しい話を聞きたいと思っていたが、それも不可能になってしまった。

今朝の新聞に、ルトヴィッチ・トジ博士が九十二歳でこの世を去ったことが報じられていたからだ。

〈了〉